

吉田豊治著 『大分県中等学校史の一断面』

このたび、本会監事・大分県先哲叢書審議会会長吉田豊治

先生が『大分県中等学校史の一断面——入学考査・学校新設・終戦前後の学校生活——』を、みもど書房から出版された。

B5版、六三八頁という大著である。

本書の構成はサブタイトルで要約されているが、次の三部からなる。

第一部 昭和期の旧制中等学校入試制度の推移——特に大

分県の中等学校入試と県民の動向——

第二部 学校新設をめぐる諸問題

第三部 終戦前後の中等学校

本書で扱った時代は、主として大正末期から戦後新学施行前の昭和二十一年とし、各部とも、その時代の背景と問題点を余すところなく、掘り起こしている。

著者が最も力点を置いたのは第一部であろう。三五〇頁を

あて、本書紙幅の過半数を割いている。昭和二十一年まで、

各年毎に豊富な史資料をもとにして、綿密な考証を行ない戦

前の「入試改革」を分析している。

第一次世界大戦を機に、全国的に中等学校以上の教育機関が拡張されたが、進学熱の高まりはそれを大きく上廻わり、受験戦争の激化をもたらした。「試験地獄」の到来と新聞は報道した。大正十三年、本県六中学校の競争率は二・四五倍にのぼった。

昭和二年度の本県中等学校入学試験競争率を本書より概観してみよう。中学校の平均競争率は一・七四倍、高等女学校一・五六倍、工業学校四・六六倍、商業学校二・三倍、農業系学校一・四倍、最高倍率校は順に二・一五倍、二・八〇倍、四・六六倍(当時工業は一校)、三・一二倍、一・八三倍となっている。さらに師範学校は五・九四倍、女子師範は二・六七倍であり、総合的にみれば一・八九倍という難関であった。

学力偏重の中等学校入試制度は、小学校での「準備教育」放課後・日曜・祭日の補習授業をエスカレートさせた。過重

な「準備教育」は、児童の健全なる心身の発達を阻害するという理由から、弊害のある過度の準備教育を如何にして緩和するか、文部省や県当局からの方策が毎年のように示されている。「準備教育」は社会問題化していたのである。

文部省・県の方針は、内申・面接(口頭試問)の比重を高め、人物評価を取り入れた昭和三年の入試改革へと進展する。ペーパーテストを廃止した思いきった改革であった。しかしながら、内申書の信頼性や口頭試問の内容等問題点が多く、五年には筆記試験が復活する。これにより再び「準備教育」が盛んとなったのである。補習は十年代前半まで続く。

戦争の拡大は、当然教育界にも多大な影響を与えた。入試制度も、身体検査を重視するようになり、昭和十五年以後は学科試験を全廃する。また、県都大分市の発展を背景に、十五年には、大分第二中学校設立案も県会で提案される。これは予算の関係で実現せず、大分中学校の学級増で消滅するが、戦後の普通科高校新設につながっていく。十八年には一部で「総合制」・「地域指定」等も試行された。

これ等戦前・戦中入試改革・改正に、現在の高校入試制度改革との類似点をみることが出来る。

第二部は、大野中学校を柱としている。政争がからんだとはいえ、中学校の適正配置の立場からの新設、国家的要請からの廃校への過程が如実に描かれている。

さらに、専門学校誘致運動や、著者が情熱をもって取り組んだ別府羽室台高等学校の創設を扱っている。

第三部は、終戦前後の中学校の実態が、現場の史資料を中心にして赤裸々に描写されている。十九年四月から二十一年三月にかけて二年間にわたる激動の時期の記録である。

著者の「あとがき」にあるように、従来の教育史では入試制度の大きな改革や関連資料は簡単に触れるにとどまり、前後の動揺などについての分析などはなされていなかった。本書には、この点について精力的に取り組んだ成果が見事に示されている。

今、統廃合を視野に入れた高校の適正配置問題、入試改革、通学区の問題等が論議されている。しかしながら、これらの問題は昭和前期においても、常に取り上げられていることが本書によって明らかにされている。

教育改革を考える上で大いに参考になる労作である。

(加藤泰信)